

◆2009年 6月

八木健選「七句」・・・（鑑賞も五七五）

1. **女難の相なしといはれし業平忌**（有吉堅二）
最大の女難が今のカミサンで・・・ですか
2. **開花日は二日後桜カんでる**（池田無了）
俳人も思はずカミ一句かな・・・ですね
3. **夏場所や天敵たらず土俵入り**（桜井宇久夫）
天敵や朝青龍にうつちやられ
4. **赤信号を突つ走るつばめかな**（佐治洋一）
つばくらめ赤信号を喉につけ・・・ですから
5. **にんげんにできない速さかたつむり**（広瀬遊亀男）
せまい日本だからゆつくりでで虫は
6. **見上げれば肩も凝ります藤の花**（伊藤浩睦）
肩凝りのあとリストラの肩叩き・・・かも
7. **去年の巢のリフォーム急ぐつばくらめ**（井野ひろみ）
この頃やつばめ社会もエコブーム

青山桂一

早乙女は眺めるだけの今日の農
揚雲雀栖いづくと探しおり
仲よくと残りし鴨に伝へたり

麻生やよひ

蟻地獄自慢の斜面に餌落ちず
雨風に散りてもみたし水中花
不可思議と不気味毛虫の丸まりて

秋月裕子

五月の海まぶし引込線さびし
いちご摘みかごを抱えて香にむせぶ
若者等マスクだらけや歩道橋

足立淑子

梅雨さなか駐輪場で泊まる足
短夜や英語でしゃべらナイト見る
非通知の電話すぐ切れ桜桃忌

阿部陽子

甲冑の小さき威厳飾りけり
飾られて踏ん張り直し武者人形
鯉幟休めり空にぶら下がり

有吉堅二

初鯉恨めし吾輩禁酒中
女難の相なしといはれし業平忌
どこまでが顔か大きく汗拭ひ

飯塚ひろし

更衣バツーなどは当たり前
飛魚はひよいと地球をはみ出せり
寝た振りも一兵法や臺

井口夏子

竜宮に我をいざなふ海亀くん
落ちこぼれたら
抜かれてしまふ黒穂かな
ファスナーのだんだん下がる衣替え

伊藤浩睦

春灯や死ぬほど暇な美術館
見上げれば肩も凝ります藤の花
潮干狩わたしは貝になりたくない

井野ひろみ

鶯や一声聞かせそれつきり
去年の巢のリフォーム急ぐつばくらめ
草取りや知らぬ間に手が隣まで

越前春生

夏帽子脱げば浦島太郎めく
することのなき父の日の暮れにけり
焼酎の輪や青雲のこござし

笠 政人

丸剥きにされて羊の衣がへ
子雀のころんで見えし空の色
寝たままの金魚体操明易し

加藤澄子

花樽白檀の香を放ちけり
糸瓜植へて子規の目線で眺め居り
蛍飛び来る携帯の写メールに

川島智子

政治家も小粒になりぬ鯉幟
旺盛なみどりに負けて五月病
蛞蝓家なき故に厭はるる

草薙一朗

柱なきマンションに住み子供の日
インフルに首座をゆずれり夏の風邪
女王蜂老いて乱れり蜂の国

倉方 稔

昭和の日遺品のラヂヲよく喋る
海の日や模型帆船波を恋ふ
生ビール喉越しわづか数秒間

小杉 隆

もやし売れ軍手の売れぬ梅雨の街
検査後に妻へ苺のケーキかな

有富洋二

海洋族磯野家系図初鯉
雨粒に乱れてしまひ蟻の列
突進の手加減したり袋角

安藤淑子

老鶯の呼び合ふ深山謙虚穴居
新緑を褥に月山眠りこけ
酒藏を眼下に踊る鯉幟

井口寿々子

自販機の御機嫌ななめ走り梅雨
一匹の蜘蛛空中を遊泳す
東京のビルを揺らして青嵐

池田無了

春めくやちかんの顔して絵など描く
開花日は二日後桜カんでる
へそ出して花もはじらう乙女かな

稲沢進一

臺鳴くや虎造美声かと思ふ
考へることは他人に任せ夏
老鶯や年金暮らしまだ早し

今城夏枝

心臓に香りの届く新茶かな
ぺちやくちやと乙女らの行く薄暑かな
味もまた青しとおもふそら豆よ

奥脇弘久

五月富士中途半端な空にゐる
冷奴地酒の蘆畜馬耳東風
薔薇園の色香に迷ふカメラマン

可知豊親

真にうけて貰ひ泣きする4月馬鹿
役づくり万全にして万愚節
その嘘は誠かと問ふ万愚節

加藤 賢

青葉憂し浪曲唸る八木健氏
牛蛙喉つくろうて鳴く奴も
声ほどの数には見えず行々子

久我正明

たけの子の突然出でて地主かな
しびれけり抜かれた後のお大根
ウグイスの発声練習声喰れる

工藤泰子

アンテナを宙に拡げて海芋咲く
猫消ゆる茅花流しに流されて
柿若葉前頭葉を赤く染め

黒田忠一

メーデーの行列まばら風に散る
孟宗竹の根は着実に家に向く
山菜のどつぶり漬かりし腹笑ふ

小玉石水

国中の騒ぎを逃れ温泉に浸かる
診断を自分で下し叱られる

夏風邪は豚の恨みやトンカツ屋

桜井宇久夫

夏場所や天敵たらず土俵入り
夏風邪にマスクしてみる侘住ひ
人肌はすでに忘れし冷し酒

佐藤古城

喰うかいと九絵すすめらる空海忌
門の花間はれシランと答へけり
蕊を見せ薔薇が誘へりアイラブユー

佐野ゆきこ

楽しみは日曜パズルで自己確認
八工叩く家宅侵入の廉により
庭の木と話す妻みて夫訝り

清水呑舟

我が性に欲しき気品や業平忌
海開新神主は晴れ男
かにかくに美しきは良けれ水中化

壽命秀次

泳ぎ舞ふギアチェンジして鯉幟
新妻のまとめて脱がす筈の
指先に灸を据へる?穂かな

杉村福郎

夏立つやマスクして観る阿修羅像
竹の子の曲がり出たるは誰のせい
薔薇を持つ手に蜂が王右往左往

鈴木みのり

サングラス我が家代々下がり眉
すったもんだぺんぺん草の独り勝ち
オロナミン飲んでではつらつ白牡丹

高橋真紀子

夏やせを恐れメタボのままている
冷や酒の一杯ごとに愚痴あるる
ヒキガエルおのが醜い顔知らず

高橋素子

観覧車ぶつかりそうな雲の峰
鯨夫婦の喧嘩をとらへ地震計
わが鼻を棲家としたる桐花粉

田代青波

みちのくの馬蹴と言へり路の臺
子つばめの巢に
片寄つてへしやげある
学童の揶揄先生のサングラス

田中章子

柿若葉ムク顔も緑色
金魚鉢サラダを盛りし新婚さん
いくつ星あるのか見合ふ天道虫

椿 良松

喧嘩するごとと鞆の合はぬ揺れ
同じ皺つくりし夫婦春惜しむ

すれ違ひ多き会話のキャッチボール

佐治洋一

山笑ふ乳母車から犬の顔
赤信号を突つ走るつばめかな
目借り時蛙が講義聴きしかな

佐野萬里子

予報はずれ卵の花腐し髪染めに
さくらんぼ孫より先に鶉の来て
葉桜や明智の妻の墓小さき

柴田真一

合コン言ふ社交場あり山笑ふ
不況風故郷の檀家も干上がりて
しかばねかんむりへねづく座禅草

首藤虎男

山彦はヤッホーこだまは鹿と聞き
生蛸に鉢巻しめて定まらず
水増しで口裏合わせ肝冷やす

白井道義

擦れ違ふ犬にべんちやら風薫る
角刈りも丸刈りもあり剪定す
手の平を返したやうに五月来る

鈴木和枝

都会のスズメ私のぼつかり見てる
田を這い上り田植機のハミング
定位置に招き描いて亡父と思う

高田菲路

草刈るや校長職に逃げ場無し
菅蒲葺手伝はされて独鈷の湯
朝市の婆の猥談蒸し鮑

高橋 都

これ以上まるくはなれぬねぎ坊主
似合うマスク似合わぬマスク
新ウィルス
遠雷やジャグジーバスは十七階

田代青山

モンローのほほゑみ黒子春愁
フラフープしてをる星や春愁
焼きそばを山と焼きたる桜かな

高田敏男

斑猫や付馬つれて若旦那
牡犬のモンローウオーク茅の輪かな
親方の目を盗みけり三尺寝

種谷良二

質草にならぬ女房と初鯉
読むよりも鯖は煮てよし焼いてよし
栄誉賞初めて飛んだ飛び魚に

飛田正勝

母の日や父と子の日を道連れに
シンプル・イズ・ベストトマトの丸か

目借りどき欠伸の喉の奥の闇

戸谷笑子

吹流し滑稽菌も泳ぎをり
後期とは高貴なりしや白薔薇
意外やな真打なりし夏の豚

永島董玉

じやがたらの花や実になる話とて
青蘆に考へる人蒼褪めし
一匹の蠅の五月蠅き独り酒

西 をさむ

大脳とキャベツは直ぐに腐り出す
日本にそろそろ倦いて通し鴨
禅寺の煙ひとすじ毛虫焼く

橋本博之

花吹雪これがお礼であつたなら
三分の診療卵の花腐しかな
年頃の娘なくとも桐の花

原田 暉

夕立に周章てて潜るプールかな
衣更えてやけに小さくなりしかな
筍をたけのこほどの子が抱へ

久松久子

落し文つれなき風に吹かれをり
雀の子三十六計まだ知らず
ごきぶりに殺しの手口聞かれけり

広瀬遊亀男

薫風来をんな風神の吐息とも
人騙す政治屋のシャツ白Yシャツ
にんげんにできない速さかたつむり

藤森荘吉

夏来たるゆるいパンツはもう捨てる
休日のお風呂の中で石鹸玉
かたつむり些か自由なる速さ

二神重則

かゆみ止め置いたはずだが五月かな
夏風車思い思いの起電力
五月病君もたれるか吹き流し

星加克己

けつこうと鳴くや眞昼の羽抜鶏
丁と打ち半と返して蠅叩く
ちらりじろり見て見ぬふりの扇風機

前川敏夫

こんな筈ないと老鶯鳴き止めず
時の日や腕にはめたる指令塔
悟りとは睡りに近し未草

松田吉憲

年金の受給手続サングラス
絵日傘のまつすぐに来る興信所
夏めくや妻の大きな咀嚼音

丸山祐司

人間の極悪非道目刺焼く

じり

現役の魚食ひし鱧食ひにけり

中沢荘荷

初鯉思案半ばで買ひにけり
張り切つて来たが誤算の夏句会
甘酒を孫の分まで手を出しぬ

囃 崇子

払つても蟻付いてくる私甘い？
とびこえた五月そよ風室温二十八度
食逸す春菊花を生け飾る

根岸敏三

雲流る羅針盤なる水馬
噴水の無限の景に励まसार
足軽似何を守るや蝸蚪の群れ

長谷川治子

あるはずの服見つからぬ更衣
モデル着ているから似合う更衣

彦阪義久

パソコンにイフゼンエルス昭和の日
警察犬訓練学校青嵐
その日より去年に戻る更衣

日根野聖子

ぼうたんや堂々風に揺れてある
あれそれで会話成立豆ご飯
総身にまぶし新緑の風なるよ

藤岡蒼樹

夜桜や三味と掛け合ひ都逸よ
一献と缶を数ふや花の宵
突風にとられ地団太風の糸

藤原セツ子

城山の緑縫ひつつリフトかな
万緑のみどりに染まり武相荘
雲一朵千の緑はもこもこと

坊野留吉

オペラ座に招待状を春の猫
山吹になりはしまひか給付金
端山とて今に見ておれ椎若葉

堀川亮二

竹の子の場所とりかくも法外な
菜園のぶるぶる震え春嵐
行き先は風に任せて恋ポート

松尾軍治

インフルにマスクかけたし阿修羅かな
カタツムリでんでんむしかエスカルゴ
恋猫に心うなづき床の中

丸山紘一

断罪も鬼女は春眠覚めやらず
春宵の酔狂庇ふ身の覚え
お遍路も並ぶこんびら芝居小屋

三木蒼生

さらばさらばとちるさくらさくらかな

遺言がいさかひの元地虫出づ
花筵肉付きうすき尾?骨

三塚不二

何事も決断一つ残る鴨
乱鶯や弱き男の応援歌
茶摘女の遠目がよろし紅襪

無患子

知らぬ間の傷あと残る衣更え
昼の飯木の芽草の芽振舞わん
ふゆ太り振れ振れとヨガは言う

むつみ

マイカーに同乗頼む天道虫
河骨のなすすべもなき名前かな
ネット裏球筋を読む雨蛙

百千草

麦の秋背中を搔いて呉れないか
壮絶な最期と言はむ薔薇散れり
この星に今ある不思議夕薄暑

森 要

風まかせメタボ知らずの鯉のぼり
書家の意に作句促す初夏の風
暑くなり蝶々橋に蔭宿り

八木 健

虫も体操ぼうふらのスクワット
子燕の首の伸縮自在かな
どこが違ふの夏瘦とダイエット

山岡冬岳

下心あつて団扇にあふぎけり
抜け駆けの筍の子の竹となる
盗人に見られ筍掘つてをり

山口濤聲

上流を目指してばかり水馬
紅ひいてメタボリックの更衣
遭遇を知らぬそぶりの蝸牛

山本あかね

夏場所やインフルエンザ押し出しに
風五月味付海苔が上顎に
草餅や圧倒的に漉餡派

山本 賜

大根の花の盛りに出つくはす
聖五月オセロゲームの白と黒
むらさきのサンダルにして蛇に逢ふ

吉田恵子

足裏に凸凹感じ薄暑かな
先方もこちらを覗きバードデー
蚕豆を摘む老夫婦の口ゲンカ

渡部さだを

青芝の抵抗パツと決まらない
家事みんな夫に丸投げ更衣
部活の子頬つぺに落す柏餅

ダイヤモンドダストはガラス四月馬鹿
黒日傘キツネマスクのマドンナ来

三橋一笑

梅漬やマニュアル顎でページ繰る
運動会おなご騎馬がのし掛かる
栗の花住職の膝に吾子眠る

虫倉蟬音

大婆の畑の実梅?く初老
粹狂の六十路男ぞ菖蒲酒
更衣シャツもズボンも寸足らず

村上美和

海呑むはいそぎんちやくの大志なり
島茂る遊女の墓は石三つ
ひと雨の欲しくて新樹騒ぎだす

森岡香代子

洗ひざらしのシャツの
メタボのシルエット
しまひまで筋を通して露の皮
茹でられし新じやが双肌ぬいでおり

諸中昌之

大西日あびて落した草野球
泣き相撲「泣いて頂戴」親ごごろ
蝦夷梅雨や湿ることなき味噌つ滓

柳澤京子

新緑や根生再び滑稽句
人馴れの雉も声挙げ歩み寄り
子供の日婆は患者に孫ドクター

山口えつこ

懸垂のごと絡まるや藤の花
ポケットに丸文字のメモ大手毬
ライラック稚児の玩具の飯一膳

山下正純

村雨や三三五五の花筏
実直を旨として立ち葱坊主
雛嚙粟の揺れて胡蝶をまねびをり

もとしづ香

ちやほやとその一つ目のさくらんぼ
待ち時間もうないわたし浮いて来い
母の日へよちよち寄つて来る昔

横山喜三郎

百本の脚をからめず百足逃げ
つかの間の若妻消えて昼寝覚め
かなかなをまづ手始めの句作かな

吉野香風子

褒められて三日つゞきの浅蜷汁
行く時は思へど一人ではさみし